

- E-61** 肺癌細胞の転移浸潤における G-CSF の役割—高い浸潤能を有する細胞株での検討
九州大学胸部疾患研究施設
○裴 新海、中西洋一、高山浩一、白 鳳、八並 淳、川崎雅之、若松謙太郎、高野浩一、原 信之

【目的】G-CSF が肺癌細胞の転移浸潤に及ぼす影響およびその作用機序について検討を加えること。

【対象と方法】肺癌細胞株 NCI-H157 を使用した。浸潤能は invasion assay 法を、培養上清中の G-CSF 濃度は EIA 法を、G-CSF 受容体と uPA の mRNA 発現は semiquantitative RT-PCR 法を、uPA と MMP の免疫染色は ABC 法を、uPA と MMP の活性は zymography 法を用いた。

【結果】H-157 株の培養上清中には、対照群に比べ有意に高い G-CSF が検出された。この細胞株は高い in vitro 浸潤能を有していたが、G-CSF を添加しても浸潤能は促進されなかった。一方、抗 G-CSF 抗体により in vitro 浸潤能もヌードマウス移植腫瘍の肺転移も抑制された。RT-PCR 法にて、G-CSF 受容体の mRNA が検出された。H-157 は他の細胞株に比べ、uPA の mRNA 発現レベル、uPA 活性とも高く、また、MMP-2 の発現と活性も高かった。

【考察】高浸潤性の細胞株 H-157 では、G-CSF がオートクライン的に転移浸潤促進物質として作用していた。この浸潤促進作用の機序の 1 つとして、G-CSF が、uPA や MMP-2 の産生や活性化を介している可能性が示唆された。

- E-63** 胸膜中皮腫手術例の臨床的検討
日本大学医学部第 2 外科

○並木義夫、飯田 守、大森一光、北村一雄、小笠原弘二、村松 高、長坂不二夫、西村 理、羽賀直樹、古賀 守、四万村三恵、瀬在幸安

【目的】今回我々は、当科で経験した胸膜中皮腫手術例について臨床的検討を行ったので報告する。

【対象】1975 年から 1997 年 3 月までの間に当科に入院した胸膜中皮腫症例 17 例中、手術例は 9 例（男性 3 例、女性 6 例）で年齢は 20 歳から 71 歳、平均 48.6 歳であった。

【結果】6 例が限局性胸膜中皮腫（良性 4 例、悪性 2 例）、3 例がびまん性胸膜中皮腫であった。良性限局性では臓側胸膜発生の 2 例に肺部分切除、壁側胸膜発生の 2 例に胸壁合併切除を施行、他病死した 1 例を除き予後は良好であった。悪性限局性では胸壁合併切除を行い、低悪性度腫瘍と診断された症例は術後 24 ヶ月目に再発および遠隔転移に対し再切除を行い術後 38 ヶ月生存中である。また、胸壁合併右上葉切除例では術後 8 ヶ月頃より局所再発し、術後 1 年で腫瘍死した。びまん性の 2 例に胸膜肺全摘術を施行し、不完全切除の 1 例は術後 11 ヶ月、ほぼ完全に切除した 1 例は術後 3 年で各々腫瘍死、1 例は右上葉切除・胸膜および横隔膜部分切除を施行し術後 19 ヶ月担癌生存中である。

【結語】良性限局性胸膜中皮腫の予後は良好であるが、悪性限局性胸膜中皮腫では広範囲に切除しても予後不良であった。びまん性悪性胸膜中皮腫は一般に予後不良であるが胸膜肺全摘術により延命効果が得られた。

- E-62** 限局性悪性胸膜中皮腫の 2 例
佐世保市立総合病院内科¹、同外科²、同病理³、長崎大学第 2 内科⁴
○荒木 潤¹、吉塚直人¹、真崎義憲¹、夫津木要二¹、水兼隆介¹、浅井貞宏¹、南 寛行²、中村 譲²、岩崎啓介³、河野 茂⁴

【目的】限局性悪性胸膜中皮腫の 2 例を経験したので臨床的検討を加え報告する。

【症例】症例 1 は 68 歳、男性。主訴は左胸痛。既往歴として 18 歳に肺結核、36 歳に左結核性胸膜炎がある。職歴で石綿の使用歴あり。現病歴は 1989 年 5 月頃より左側胸部痛出現し、次第に痛み増強し息苦しさも出現したため 1990 年 1 月 8 日当院受診した。胸部 X 線写真でびまん性の粒状網状影を認め、左側の胸膜肥厚および胸壁より中肺野に突出する腫瘤がみられた。胸部 CT 写真で腫瘤は肥厚した壁側胸膜に囲まれ、胸壁側は筋層に浸潤していた。そのため胸壁とともに腫瘍を合併切除した。病理組織学的には肉腫様成分と上皮成分よりなる悪性中皮腫と診断された。術後経過は良好で現在生存中である。症例 2 は 63 歳、男性。主訴は縦隔腫瘤。1996 年 9 月、慢性肝炎の経過観察中胸部 CT 写真を撮り偶然発見された。部位は横隔膜直上の後縦隔部にあり、手術した。その結果縦隔側の胸膜より発生し中葉に一部浸潤した限局性の上皮性の悪性胸膜中皮腫であった。

【結果および考察】悪性胸膜中皮腫はびまん性で胸水を貯留するものが主体で限局性の悪性胸膜中皮腫は非常に稀である。2 例とも手術により完全摘出でき予後がよく興味深く思われ報告した。

- E-64** 悪性胸膜中皮腫の臨床的検討
国療肺癌研究会

○上田 仁、根本悦夫、斉藤龍生、田村厚久、橋詰寿律、小林孝暢、村上 勝、多田敦彦、源河圭一郎、池田正人、小松彦太郎、柳内 登

【目的】悪性胸膜中皮腫は予後不良であるが、その頻度は比較的希である。多症例での解析すべく国立療養所肺癌研究会所属施設での経験症例を集計し、臨床的検討を行った。

【対象】1983 年から 1996 年までの 10 施設で 29 症例を経験した。15 例手術が行われた。組織型、臨床病期などと予後との関係を検討した。

【結果】年齢は 32 歳から 84 歳。男性 24 例、女性は 5 例であった。組織型は epithelial type 10 例、sarcomatous type 6 例、mixed type 9 例であった。Burchart 分類では stage I 13 例、stage II 14 例、stage III 0 例、stage IV 2 例であった。手術例 15 例のうち、胸膜肺全摘 6 例で、他は、生検、試験開胸などであった。全症例での MST は 225 日、最長生存期間 1795 日であった。胸膜肺全摘例の MST は 164 日、他の群では 272 日であったが、有意な差はなかった。組織型別での予後も有意な差はなかった。stage I の MST は 275 日、stage II は 188 日であり、stage I が予後良好であった。

【結語】胸膜中皮腫は予後不良であり、根治術としての胸膜肺全摘術の臨床的效果は薄いと考えられる。併用療法の方の更なる進歩が待たれる。